
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 152

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3021. GRE試験に向けた最終確認の終了
- 3022. GRE試験の結果
- 3023. GRE試験からの解放感を感じて
- 3024. ハーバード大学教育大学院の出願に向けて
- 3025. 学ぶことを託されて
- 3026. GRE試験を終えた日の夜の夢
- 3027. スティーブ・サイデル教授からの返信メール
- 3028. 緩やかな時の流れの中で
- 3029. 夕方の作曲実践とTOEFL試験に向けて
- 3030. 【北欧旅行記】北欧旅行に向けた出発の朝
- 3031. 【北欧旅行記】スキポール空港に向かって
- 3032. 【北欧旅行記】スキポール空港のラウンジより
- 3033. 【北欧旅行記】北欧の空の上から
- 3034. 【北欧旅行記】ストックホルムでの失態と子犬との出会い
- 3035. 【北欧旅行記】ストックホルム滞在の二日目の朝に
- 3036. 【北欧旅行記】過去の記憶と小さな土台
- 3037. 【北欧旅行記】水の精霊が住むストックホルム
- 3038. 【北欧旅行記】ストックホルム滞在二日目を終えて
- 3039. 【北欧旅行記】ストックホルム滞在の三日目の朝に
- 3040. 【北欧旅行記】ノーベル博物館を訪れて

先ほどGRE試験に向けた最後の確認を行った。ETSのウェブサイトに行き、そこで本番を想定した模擬試験の問題を復習していた。これから長丁場の試験が始まるため、長く復習をするのではなく、目を問題文に慣らす程度に留めておくようにした。スタートのライティングセクションでは、設問文を丁寧に読み、何を求められているのかをしっかりと把握する。

GREのライティングにおいては、問われていることを正確に解答の中に反映しているかどうかはとりわけ重要になる。設問文を読んだ後に、自分が書こうとする論点を手元のメモ用紙ではなく、解答スクリーン上に打ち込んでいく。これによりメモを取るために手を動かす時間を省くことができる。そういえばこれまでは、こうした工夫を思いつかなかった。

とにかくGREのライティングでは、分量が求められるため、十分な量の文章を書くためにはこうした工夫が大切になるだろう。ライティングのセクションは二問あり、その次に読解のセクションがやってくる。

読解のセクションでは、文意が把握しづらい問題は深入りすることなく、スクリーン上の機能を使って問題に印をつけて、最後に時間が余ったら解くようにすればいい。ただし、時間いっぱいまで最後の問題まで辿り着いた場合、その問題に戻ってこられなくなってしまうかもしれないので、暫定的な解答をしておく。空欄補充の問題であれば、二回は読む時間的なゆとりがあるので、二回は問題文を読む。

純粋な読解問題に関しては、長いものであれば一回しか読む余裕はないので、一回目の時にしっかりと内容理解をしておきたい。昨日書き留めていたように、読解問題の設問が一つのものについては先に設問文を軽く読む。一方、設問が複数にまたがる時は、文章を最初から最後まで読んだほうがいい。各セクションの合間にある1分間の休憩と真ん中にある10分間の休憩は、有効活用する。特に1分間の小休憩では、目を閉じ、深い呼吸を時間一杯まで行い、次のセクションに備える。一つのセクションはライティングにせよ、読解にせよ、数学にせよ、30分間だ。この30分間の間に極度な集中状態に入る必要があるため、1分間の休憩では十分にリカバリーを図る。そうするこ

とによって、次の30分間も高い集中力を持って問題に取り組むことができるだろう。1分間という時間をないがしろにするのではなく、それを大切なものとして活用したい。

読解セクションの後に待つ数学のセクションについては、とにかく落ち着いてミスのないように問題を解いていく。ケアレスミスさえなければ、実力で間違える問題は多くて一、二問程度だろう。簡単だと思われる問題は取りこぼしのないように、長考を要すると思われる問題はスクリーン上に印をつけて、最後に解いてもいい。数学のセクションに関しては時間が余るであろうから、余った時間は手こずった問題を再度確認することに活用したいと思う。

試験会場に入るまであと一時間ほどになった。ここからはホテルのチェックアウトに向けて準備をし、試験の開始とともに脳を存分に働かせられるように心身の状態をここからさらに整えていきたい。アムステルダム:2018/8/23(木)07:32

3022. GRE試験の結果

つい先ほどGRE試験を終え、今フローニンゲンに向けた列車がスキポール空港駅から出発した。試験会場近くの駅から一度スキポール空港駅に行き、そこからフローニンゲン直通の列車に乗った。明後日から北欧旅行に出かけることになっており、明後日の午前中にも再びスキポール空港駅に来ることになる。スキポール空港駅にこのような短い間隔で訪れるのは初めてのことだ。

これから二時間ほど列車に揺られ、フローニンゲンに到着する。今日のアムステルダム及びフローニンゲンの天気は曇りであり、気温は肌寒い。ちょうど夕方から雨が降ることになっており、私がフローニンゲンの自宅に到着するまではなんとか天気がもってくれるだろうと期待している。

ちょうど午後一時にGRE試験を終えた。今回利用したプロメトリックセンターは非常に綺麗であり、職員も気さくな方であった。これまでTOEFLを受験する際にはプロメトリックセンターではなく、語学学校などで受験することが多かったが、受験者同士の仕切板がダンボールのところもあり、すべての会場が望ましい環境を提供しているとは限らなかった。だが、プロメトリックセンターであれば環境はしっかりしているため、秋か冬にTOEFLを受験する際はできるだけプロメトリックセンターを活用したい。

職員の方に聞くと、今回の会場でもTOEFLを受験することができるらしく、この会場で今度はTOEFLを受験したいと思う。その際には、またホテルで前泊をしようと思う。ホテルに前泊しない場合には、最寄りの試験会場まで最低でも二時間半かかるため、移動による疲労は馬鹿にならない。また、電車の遅延リスクなども考慮すると、やはり次回TOEFLを受験する際も前泊をしようと思う。今回のプロメトリックセンターの周りの地理にも明るくなり、ホテルや駅からの距離も望ましいものであるため、今日自宅に帰ったら早速TOEFLの予約をしておきたい。

職員の方からも助言があったが、その会場の収容人数はそれほど多くないため、もし二ヶ月以内に受験を考えているのであれば、今から予約をした方がいいとのことであった。仮に今日予約するのであれば10月末までのどこかの日時で予約ができる。10月は特に旅行に出かけるわけでもないので、10月に一度TOEFLを受験しようと思う。

さて、今日のGRE試験の出来であるが、最低限のスコアはクリアできたように思う。GREはTOEFLと異なり、ライティングセクション以外のスコアはその場でわかる。すべてのセクションの問題を解き終わり、スコアを表示する際はかなりドキドキしたが、結果はVerbalが155点、Quantitativeが167点であった。どちらのセクションも最高点が170点であり、Verbalのセクションは約70%(厳密には69%)の位置にあり、Quantitativeのセクションは約90%(厳密には93%)の位置にある。

当初の目標スコアは、かなり高望みをしており、Verbalに関しては160点を目標にしていた。このスコアを取るためには、ケアレスミスが一切なく、かつ勘で選択肢を選んだ問題のほぼ全てが正解をしていて初めて達成されるようなスコアであり、現実味は乏しかったと言える。ただし、過去に模擬試験で一度161点を獲得したことがあったため、一応その点を目標に掲げていた。最低目標はちょうど155点に設定しており、今回なんとかその最低ラインを超えることができたので、まずは一安心だ。

上記のパーセンテージの意味は正解率ではなく、例えばVerbalの70%の意味は、100人の受験者がいれば上位30人のうちの一人、Quantitativeにおいては、100人のうち上位10位以内ということになる。GRE試験が英語がネイティブかつ米国の大学の学士号を取得した人たちのためにあることを考えると、このスコアは外国人の私にとって全く悪くない数字である。あとはライティングのスコアを待つのみである。

ライティングに関しては6.0点中4.5点を取ったのが最高であり、今回のスコアが気になるところだ。仮にライティングのスコアが思ったほど高くなかったとしても、それを補完するように、昨年英語で出版した論文のサンプルを応募書類の一つとして大学院に提出したい。

ライティングのセクションを30分×2で解き終えた後、次に英文読解のセクションが来ると思い込んでいたのだが、実際には数学のセクションから始まった。すぐに頭を切り替えようとしたのだが、うまく切り替わっていなかったのか、最初の数学のセクションは本当に手こずった。簡単な問題に対して慎重になりすぎ、5問が残っている段階で残り時間が5分となっていることに気づき、そこからは慌てて問題を解いた。最初のセクションのスコアはかなり低いだろうと予想しており、このままだと数学のセクションは160点を下回ってしまうと覚悟していた。

だが、そのセクションはもしかしたらサンプル問題だった可能性があり——いきなりサンプル問題が出題される可能性は低そうだが——、かなり多くの問題が間違っていたとしても、スコアには全く影響しなかったのかもしれない。いずれにせよ、残り二つの数学のセクションについては比較的満足のいく回答ができた。結果として、167点だったので、おそらく合計で二、三問ほど間違えてしまったのだろう。

読解のセクションに関しては、最初のセットの空欄補充と同義語選択問題にかなりの手応えがあり、最初のセットは8割近くの正答率だったのではないかと思う。この調子で休憩後のセットも解こうと思っていたところ、GREではない試験を受けていた隣の席の受験者が何かコンピュータトラブルに遭ったようであり、係員がその対応のために部屋に入ってきて、小声で話す声が読解の集中力を随分と削いでしまった。なんとか気にしないように努めても、一度気になりだすとそこから完全に頭を切り替えることは難しく、二つ目の読解のセクションのセットに関しては、後半の問題は勘に頼るものがいくつかあったように思う。

そうした中で最低限の155点を取れたことは喜ばしいことだと言える。一ヶ月に渡るGRE対策もこれで終わりであり、ライティングセクションのスコアがどうであれ、今回のものをアプリケーションの提出用にする。アムステルダム:2018/8/23(木)14:37

3023. GRE試験からの解放感を感じて

フローニンゲンに向かう列車が着実と目的地に向かっている。あと一時間半ほど列車に乗ればフローニンゲンに到着するだろう。

とにかく今はGRE試験から解放されたことの喜びが非常に大きい。今回の試験対策を通じて、確かに語彙力をさらに高めることができたのは間違いないが、GRE試験の対策を長く続ければ続けるだけ、脳が劣化するように思っていた。合理性段階の意識構造で構築された試験は、基本的には益よりも害の方が多いのではないかと思う。とりわけ、米国の大学で学士号を取得した米国人ですらGREには頭を悩ませるのだから、英語の非ネイティブがこの試験で高得点を取ることは非常に難しく、その勉強は過酷である。

単語に関しては、ネイティブですら使わないような、ごく一部の学術的な者たちが使うような単語をとにかく大量に覚えていく必要がある。しかも厄介なのは、単語の意味だけではなく、その単語の微妙なニュアンス(単語が醸し出す微妙な身体感覚)を把握しておかなければ、同義語選択問題で高スコアを取得することは難しい。そうした身体感覚まで養っていこうとすると、相当な努力が要求される。特に日本人がGRE試験の読解セクションの対策につまづいてしまうのはこの点だろう。

実は六年前に最初にGRE試験を受けた時、根を詰めて試験対策を行っていたところ、精神的におかしくなりそうになったことがある。今回の試験対策において、GRE試験の対策が脳を破壊してしまう危険性があるということ、そして精神をおかしくしてしまう危険性があることには本当に注意が必要だった。

今回の対策は脳にあまりにも負担をかけ過ぎないようにし、単語学習を進めていく際も脳の特徴にあった適度な負荷と望ましい反復サイクルに基づいて学習を進めていくようにした。そうしたおかげもあり、今回の試験対策は精神的に参ることはなかった。もちろん、六年前と今とを比べてみると、この六年間の間に欧米の大学院で三つの修士号を取得したのであるから、その間に十分なトレーニングを受けていたことを見逃すことはできない。いずれにせよ、もうGREを受験しなくていいと思うと、心がとても軽い。そもそも、今回GRE試験を受験した理由としては、芸術教育と霊性教育を探究するために米国の大学院に出願しようと思っているからである。今回も博士課程ではなく、修士課程に応募しようと思っている。

その一つの候補先に、ハーバード大学教育大学院(HGSE)がある。実は過去にGRE試験を受験したのは、すべて HGSEの博士課程に進学するためであった。だが、過去二回とも博士課程に不合格になった。一回目の受験にせよ、二回目の受験にせよ、卒業生からは修士課程から進学することを強く勧められた。というのも、HGSEの博士課程に進学するのは基本的に内部上がりの者たちばかりであり、さもなくば欧米の名門校で修士号を取得した者が毎年一人か二人入学できるかどうかの狭き門であるからだ。

今回はその助言に従い、また今の私が博士課程にすぐさま進学することを望んでいないため、HGSEの芸術教育に関するプログラムに応募しようと思う。仮にこのプログラムに合格をすることができたら、四つ目の修士号になるが、自分が過教育者であることを気にしないようにする。

いくつ修士号を取得しようとも、学びというのは一生涯にわたって続けられるものであるため、仮に四つ目の修士号を取得したとしても、それを多いと思わないようにする。むしろそれは限りなく少ないと思った方がいいだろう。生涯にわたって自分の関心領域を深く専門的に学び続けるという姿勢があれば、四つの修士号を取得することは全くもって大したことではないのだと思う。私の場合は偶然にも、自分が探究をしたいと思う分野の事柄が体系立てて学べるプログラムが学術機関に存在しており、そのプログラムに所属しながら学びを深めてきたに過ぎない。

今回のHGSEへの出願も全く同じだ。今はその他の大学院も検討しているが、とりあえずHGSEに出願することは確実だ。出願に向けての準備については、書ける範囲のことを日記に記していきたいと思う。フローニンゲンに向かう列車の中:2018/8/23(木) 15:00

3024. ハーバード大学教育大学院の出願に向けて

列車は順調にフローニンゲンに向かっている。車窓からはのどかな風景を眺めることができ、それは私の心を落ち着かせてくれる。明後日の朝にもフローニンゲンからスキポール空港に行く際にこの景色を見ることになると思うと、少しばかり嬉しい気持ちになる。

先ほどの日記で、今年は四年ぶりにハーバード大学教育大学院(HGSE)に出願しようと思っていることについて書き留めていた。基本的に私は通いたいと思う大学にたいてい一度は不合格になる。フローニンゲン大学に関しては、過去に連続して二回不合格になり、HGSEにも六年前と四年前に

一度ずつ不合格になっている。フローニンゲン大学で不合格になったのは、研究者養成用の修士課程に応募した時であり、その時は統計学のバックグラウンドにおいて不合格になった。HGSEの博士課程に応募した際には、HGSEで修士課程を取得せずにいきなり博士課程に進学しようと思ったのだが、その狭き門の前に二度ほど不合格になっている。

フローニンゲン大学に二年前に入学できたのは三度目の受験であり、三度目の受験の前には日本からフローニンゲンまで足を運び、アドミッションに直接あれこれと質問しに行った。具体的には、統計学のバックグラウンドの不足分をいかにして補えるのかについて自分の考える方策で問題ないかを確認しに行った。そういえば、HGSEに過去二回不合格になった際には、直接大学に足を運んで質問をすることなどなかったように思う。

また、七年前に唯一初回の受験で合格をしたジョン・エフ・ケネディ大学の受験の際には、この時も会社の夏休みを利用して、日本からサンフランシスコに飛び、プログラム長に直接会って話を聞きに行き、アドミッションにも話を伺ったことを思い出す。この訪問のおかげで、書類選考後の面接試験を免除してもらうことができ、私は晴れて合格をした。

今回HGSEを受験するにあたっては、一度HGSEを訪問しようと思っている。実はちょうど偶然にも、9月末か10月の初旬にボストンに行く用事があり、その際にHGSEに訪問をしたいと思う。実に四年振りの訪問だ。四年前の訪問は、出願のためのものではなく、日本の大学の研究者の方がカート・フィッシャー教授に会いたいということで、その通訳を担うことになったものだ。

あれから四年の月日が流れたことを思うと感慨深い。その時は、フィッシャー教授がプログラム長を務めるプログラムにも関心があり、フィッシャー教授からもそのプログラムを勧めてもらったため、翌年以降受験しようと思っていたが、その時にはもうフィッシャー教授は引退しており、そのプログラムに応募することをやめた。

今回応募しようと思っているプログラムは、芸術教育に関するものである。基本的には、絵画教育や音楽教育など、創造性を育む教育に関心を持っている人たちが集まるプログラムだ。プログラムについて調べてみればみるほどに、今の自分の関心事項と合致していることがわかり、今年はこのプ

ログラムに出願する。出願前に一度、プログラム長に挨拶に行き、プログラムの内容についてより詳しく話を聞いてみたい。

9月末にはちょうどHGSEの修士プログラムの説明会がボストンで行われるようであるから、そのイベントに参加し、そこでアドミッションの方に色々と話を聞きたいと思う。もしそのイベントに参加することが難しそうであれば、プログラム長に面会をする前後の日にアドミッションの方に話を聞ければと思う。新たな学期が始まると、プログラム長も忙しいであろうから、30分程度のミーティングでもいいので一度顔を合わせる事ができればと思う。もし可能であれば、プログラム長が担当するクラスに参加させてもらえればと思う。

四年前にフィッシャー教授の通訳をしにHGSEのキャンパスに訪れた時、建物内でウロウロしていたら、教育研究におけるデータ分析を専門とする教授に声を掛けられ、その流れでクラスに参加させてもらう機会があった。今回はこのような幸運に恵まれるとは限らないので、事前にその確認をしておきたいと思う。

もし都合がつけば、クラスを受講したいと思う教授に挨拶に行きたいと思う。それは例えば、ハワード・ガードナー教授や教育哲学者のキャサリン・エルギン教授である。昨年二人には自分の関心領域について助言をいただく機会があり、メールでも何度かやりとりをさせてもらった。忙しいことは承知だが、二人には是非一度直接会って話を聞いてみたい。

二人に関しても長くて30分ほどの時間を取ってもらえるかどうかを確認したい。そうしたこともあり、本日自宅に帰ったら、早速プログラム長にメールをしてみようと思う。その際に、念のため秘書の方のメールアドレスをccに入れておく。また、ガードナー教授とエルギン教授にも久しぶりに連絡を取り、面会が可能かを確認しておきたい。仮にHGSEに入学することになれば、プログラム長のコースを二つ、ガードナー教授のコースを一つ、エルギン教授のコースを二つ履修しようと思っている。つまり、半分以上の履修コースがこの三名の教授によるものであるため、この三人に会って話を聞くことは大切であり、そこでの話を元に出願動機書を作成していこうと思う。理想としては、9月の最後の週に面会ができないかに関するメールを今日の夜に送り、三人からの返信をもって航空券やホテルの予約をしておきたい。また、渡米に際してはESTAの申請を事前しておく必要があるだろう。

今回の出願結果がどのようなものであったとしても、出願に向けた準備によって、今自分が関心を寄せているものがどれほど自分にとって大切か、そしてそれはどのような理由から大切なのか明らかなになるため、出願のプロセスを辿っていくことが今から楽しみだ。フローニンゲンに向かう列車の中:2018/8/23(木)15:32

No.1256: Sentiment Toward the Autumn Night Sky

It is almost 9:30 PM, and the outside world became dark. Looking at the night sky, various feelings flooded into me. Groningen, 21:17, Saturday, 9/22/2018

3025. 学ぶことを託されて

時刻は午後の三時半を迎えた。フローニンゲンに到着するまであと30分ほどになった。スキポール空港駅を出発して以降、ずっと日記を書き続けているように思う。何かが自分の内側から外側に流れていくのがわかる。

先ほどは、ハーバード大学教育大学院(HGSE)への出願について書き留めていたように思う。なぜ私は、四つ目の修士号を取得しに、ハーバード大学教育大学院に行こうとしているのだろうか。

これまで私は欧米の大学院にいくつか所属してきたが、そこにたどり着いたのは何かの縁であり、自分に与えられた使命を全うするためなのだと最近になってよく思う。正直なところ、今の自分の探究事項を独学で深めていくことは不可能ではない。また、もう高度な学位は必要ないと思う自分もいる。さらには、ハーバード大学教育大学院で一年間学ぶための費用は、授業料だけで600万円強であり、生活費を含めると、900万円は必要になる。自分の資産を切り崩してもそこに行く必要があるのかというと、それは少しばかり考えてみなければならない。だが、そうしたことを考えるよりも先に、体が動いている自分がいる。

私は決して深く物事を考える人間ではなく、大抵直感的に動く人間だ。今回もまさにその直感が、HGSEに行くことが正しいかのように私を導いている。他にもいくつか出願校については検討しているが、今のところ自分の関心に最も合致するのはHGSEの芸術教育に関するプログラムである。何よりも、三人も直接師事したい教授がそこにいるということは非常に大きなことである。

昨夜アムステルダムのホテルに宿泊している時、なぜ自分がGREのような難解な試験を受け、なぜ私財を投げ打って再び米国の大学院で学びを深めようとしているのかについて冷静になって考えていた。どうやら、私は誰かのために、誰かの代わりになって勉強をし、勉強を通して得られた知見を共有することが自分の役割なのだと気付いた。国外で探究生活を続けていることの意味もまさにそれなのだ。

国の外で学びを深めることは、何も自分の知的好奇心を満たすためだけに行っているのではない。正直なところ、以前の日記でも言及したように、そうした自閉的な探究はもうやめにするべきなのだ。今の自分が行っている探究は決して自閉的なものではなく、探究の過程で得られた知見を共有し、その知見をこの世界の課題の解決に向けた実践につなげていくことが念頭に置かれている。これは欧州での二年目の生活を通じて気づき始めていたことである。

きっと自分は何かを託されて、再び米国の大学院で学びを深めようとしているのだと思う。自分を突き動かすものは、小さな自己から生まれたものでは決してなく、大きな自己から生まれたものであると確信している。

もう学術機関に所属しながら学びを深めることはやめにしようと思っていた私が、あえてもう一度大学院に戻り、私財を投げ打ってでも四つ目の修士課程に進学しようと思っているのは、知見、いや叡智の共有と叡智を基にした実践に乗り出そうとしているからなのだと思う。そしてそれを実現させることは、自分に与えられた役割の一つなのだと思う。誰かの代わりに勉強を続け、この世界のために学びを共有していくということ。しかもそれは具体的な実践を通じて、この世界の具体的な課題を解決するためになされるものである。それを行うことは自分の使命であり、天命なのかもしれない。

本当は大学院で勉強するよりも、この世界の静かな場所でゆっくりと生活し、そこでのんびりと探究活動と創造活動に従事したい。だがそれを許さないものが自分に課せられている。

自分を強く動機付け、自分を突き動かすものは、もはや小さな自己から生まれるものではなくなった。それは他者とこの世界と自分との接点から生み出されるより大きなものになった。フローニンゲンに向かう列車の中:2018/8/23(木) 15:53

When I woke up today, I felt very cold. Although I don't turn on a heater yet, I may do it after the next week when I come back from Boston. Groningen, 08:17, Sunday, 9/23/2018

3026. GRE試験を終えた日の夜の夢

今朝は五時半に起床し、六時過ぎから一日の活動を開始した。目覚めと共に、窓の外から雨音が聞こえてきた。幾分激しい雨が早朝に降り注いでいた。

五時半に起床した時、辺りはまだ暗く、日の出の時間が遅くなっていることを改めて思った。時刻は午前七時に近づいており、一日の活動をこれからゆっくりと本格的に始動させていく。

昨日、無事にGRE試験を終えることができ、一夜が明けた今は本当に安堵感で満ちている。今日からはもう読解問題を解いたり、ライティング問題を解いたりする必要がなく、その分の時間を探究活動と創造活動に充てることができるのは嬉しい限りだ。だが、単語の学習に関してはこれまでの二年間と同じように、トイレの中で継続していこうと思う。やはり私は単語を覚えることが好きなのだ。

頭で単語を覚えるのが好きなのではなく、身体を通じて、そして存在を通じて単語を習得していくことに喜びを感じる自分がいるようなのだ。GREの対策問題集についてはすぐに本棚にしまったが、3861個の単語が掲載された単語集に関してはトイレの棚に置いた。今日からもトイレに行く際はこの単語集を眺めることになるだろう。

GRE試験で出題される難解な単語を無理に頭に詰め込もうとすると、脳と精神が壊れてしまう可能性があるが、ゆっくりとであればそうした害はない。むしろ、高度な単語を習得することによって、英語空間における生活がより充実すると実感している。この実感はこれまで欧米の大学院で学んできた経験に基づいている。

GRE試験を終えた日の夜に、幾分印象的な夢を見た。それは暴力的な要素が盛り込まれている一方で、自然に対して畏怖の念を覚えるような要素も盛り込まれていた。夢の中で私は、小中高時代の友人と会話をしていた。そこに見知らぬ中年男性がやってきて、突然私たちに言いがかりをつけ始めた。最初友人と私は、その人物がなぜ私たちに言いがかりをつけてきたのか理解できず、その

場に呆然と立ちすくんでいた。その男性の口調はどんどんと激しくなり、しまいには「朝鮮半島からやってきたお前らは…」と差別的な発言をし始めた。

友人と私は生粋の日本人なのだが、そうであつとしても、そうした差別的な発言をしたその男性を私は許すことができず、私は突然行動に出た。言葉で応酬するのではなく、その人物に殴りかかったのである。

その男性はすぐさま地面にうずくまり、私はその男性の片方の手の手首を掴んで、手のひらを広げさせた。その時私は何かをその男性につぶやいていたが、正確にはその内容を覚えていない。おそらく、「差別的な発言の代償を指で払え」というような内容だったと思う。私は一思いにその男性の小指を折った。

一瞬ばかり激痛が走ったようであり、その男性は叫び声をあげていた。私は「もう一方の手の小指はどうするか？」とその男性に問うた。その男性は指を折られたことによる痛みからか、何も返答しなかった。そこで私は手を離し、友人と共にゆっくりとその場を去った。

そこで夢の場面が変わった。次の夢の場面でも、同じ友人が私の横にいた。そしてもう一人、年配のオランダ人の友人がそこにいた。

私たちは自然が近くに感じられる見知らぬ街を歩いていた。しばらく閑静な住宅地を歩いていると、突然目の前に小高い丘が現れた。私は思わず「あつ、あれを見て！」と遠くを指先しながら叫んだ。その方向に見えたのは、なんと立派な大樹であつた。この大樹は天にまで届きそうなほど大きく、天から枝と葉が垂れている様子は、とても美しかった。私たち三人は、その大樹に近づいてみることにした。

大樹の下から大樹を見上げると、そこにはある一人の日本人男性がいた。幾分奇妙だが、大樹の上の方の空間に鉄棒があり、その鉄棒を握りながら逆立ちをしている日本人男性がいた。その男性は地面に向かって無表情なまま逆立ちを続けている。どうやらそれはパフォーマンスのようであり、大樹を見学に来た人を楽しませるためのもののようだった。しかし、あまりにもその男性が無表情なまま地面を見つめているので、少々不気味に思った。その男性の左横の空間に、その男性の名前

が奇妙に浮かび上がっていた。幾分読み方が難しく、下の名は「五」であったことだけを覚えている。

私たち三人はしばらく大樹の下から大樹を見上げ、また来た道に戻り始めた。今朝はそのような夢を見ていた。どちらも意味深長な夢である。最初の夢は自分の内側にある暴力性と正義心のようなものを反映しており、後者に関しては自然に対する畏怖の念と関係している。特に後者の夢の中に現れた、逆立ちをしている男性は、もしかしたら樹の精霊か何かなのではないかと今改めて思った。確かに姿形は人間だったのだが、あの男性はどこか人間らしからぬ雰囲気放っていた。端的に述べれば、人間の霊魂とは別の霊魂を持っているような様子であった。夢は本当に未知な内容が多く含まれており、GREを終えたその日の夜にこうした不思議な夢を見たというタイミングについても未知な要素が多々ある。フローニンゲン:2018/8/24(金)07:23

No.1258: Transcendental Self

Last night, I was able to clearly perceive that the state of my consciousness changed from “subtle” to “causal,” and I noticed several times that I transcended the self. However, what is waiting for me beyond the transcendental self being aware of “the self transcends itself”?

Groningen, 08:31, Sunday, 9/23/2018

3027. スティーブ・サイデル教授からの返信メール

普段は早朝にメールを確認することはないのだが、今日は明日から始まる北欧旅行の旅程の最終確認のためにメールを早朝に開いた。すると、一通のメールが目にとまった。そのメールの差出人は、ちょうど私が出願を考えているハーバード大学教育大学院(HGSE)の芸術教育に関するプログラムのトップを務めるスティーブ・サイデル教授からだった。

昨日、アムステルダムからフローニンゲンの自宅に戻り、夜のうちにサイデル教授にメールを送っていた。その内容は、九月の末にボストンに行く際に面会ができないかというものであり、もし可能であればサイデル教授の授業を見学させて欲しいというものだった。すると、早速そのメールに対して返信があった。私は面会できる可能性は限りなく低いと思っており、クラスの見学も無理だろうとダメ元でサイデル教授にメールをしていた。ところが嬉しいことに、面会もクラスの見学もどちらも快く許

可をしてくれた。返信メールの中でサイデル教授はクラスの日時を教えてください、私は九月の最終週の金曜日の午前八時半からのクラスを見学することになった。

ちょうどそのクラスは昼まであり、その後にでも話をしようということになった。最も関心のあるプログラムのディレクターと実際に会って話ができるということ、そしてその教授のクラスに参加できることになり、私は朝からとても嬉しい気分になった。

メールを送り終えた後、改めてサイデル教授から指定のあった曜日を確認すると、ボストンに到着した次の日の朝であることがわかった。その週の半ばに日本企業との協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがあり、それは時差の都合上、どうしてもオランダにいる間に行う必要があった。そうしたこともあり、ボストンにいる九月の平日は本当に最後の金曜日しかなく、本来であれば面会とクラスの参加の希望を送る際に、9月末ではなく、10月の第一週をお願いするべきところだった。だが、サイデル教授は本当に偶然にも、その一日しかない平日の金曜日を指定してくださった。

もちろん、ボストンには一週間弱滞在する予定であり、後から訂正メールを送ることも可能であったが、そうした失礼をしなくて済んだことを嬉しく思う。予定では、9/28(金)にサイデル教授のクラスを見学し、その後に少しばかり面会をさせてもらう。

その翌日の土曜日の朝に、HGSEのキャンパス内で修士プログラムと博士プログラムの説明会があり、それにも参加しようと思う。サイデル教授との面会日が決まったため、これを受けて今日はもう二人ほど教授に面会希望のメールを送ろうと思う。それは昨年メールのやり取りさせていただいた、ハワード・ガードナー教授とキャサリン・エルギン教授の二人である。ガードナー教授の書籍をここ最近読み返すことが多く、また新しく書籍を何冊か購入していて読んでいた。

ガードナー教授がピアノの演奏者であり、音楽をこよなく愛しているという点、そして創造性を育む教育や真善美に関する探究を長らく行っている点に大きな共感の念を持っている。また、エルギン教授は教育哲学さらには認識論を専門にしており、「芸術を理解するとはどういうことなのか?」「芸術が教育に果たす役割や意義とは何なのか?」という点に関心を持っている自分にとっては、エルギン教授の仕事にも大変関心を持っている。

とても気が早い、仮にHGSEに進学することになれば、ガードナー教授がここ数年以内に新しく提供を始めた真善美に関するコースと、エルギン教授が提供する教育哲学に関する二つのコースを履修したいと考えている。二人に10月の最初の週に面会ができないかを今夜確認しておきたいと思う。フローニンゲン:2018/8/24(金)07:58

No.1259: Sounds in the Cold Morning

This morning is severely cold. I can sometimes hear silent voices of little birds. Groningen, 10:01, Sunday, 9/23/2018

3028. 緩やかな時の流れの中で

時刻は午後の三時半を迎えた。今日は午前中から昼食前まで協働プロジェクトに関するオンラインミーティングを行った。

GRE試験から一夜が明け、早速普段通りの生活に戻っている。それは自らのライフワークに専心する生活である。

今朝は早朝に雨が降り、午前中には一時晴れ間が広がっていたが、今はまた雲が空を覆っている。窓の外の景色を眺めると、そよ風が夏の最後のダンスを踊っているかのようだ。

明日からはいよいよ北欧旅行が始まり、今晚はその準備を行いたい。準備と言っても衣類など必要なものを小さなトランクケースに詰め、ストックホルムの空港から市内のホテルまでの地図をPDFでダウンロードしておくぐらいの準備である。

今回の旅行も極力荷物を減らし、身軽な形で旅をしたい。書籍として持っていくのはバッハのコラールの楽譜とシュタイナー教育に関する“Steiner Education in Theory and Practice (1992)”の二冊だけにする。前者は宿泊先のホテルや旅先のカフェで作曲をするために持って行き、後者に関しては飛行機の中や列車の中などの移動時間に読むために持っていく。

昨夜、フローニンゲン大学の教育学科の教授の何人かに対して、シュタイナー教育に造詣の深い人はいないかと連絡をして回った。すると、今朝方一通ほど良い返事があり、これまでは縁がなかつ

たが、シュタイナー教育に造詣の深い教授を紹介してもらうことができた。その方を通じて、オランダ国内のシュタイナー学校とコネクションを持ち、近々実際のクラスを見学させてもらえれば有り難い。少しずつだが、書籍のみならず、実際にシュタイナー学校を見学することなどを通じて、着実とその探究を進めていこうと思う。

また小雨が降り始めた。辺りは幾分明るいのだが、ポツポツと窓ガラスを叩く雨が降り始めた。

このところ、時の流れがとにかく緩やかに感じられる。時はいったい流れているのだろうか。

不可逆であるはずの時の流れがあたかも逆に動くかのような、まるで砂時計が上に流れていくかのような感覚の中にいる。自分の内側の時間感覚が変容しているのは、きっと自分の内側で何かしらの変化が起きているからにちがいない。時間感覚の変容と内的世界の変容は密接な関係にあるのではないかと思えてくる。

明日からはいよいよ10日間にわたる北欧旅行が始まるが、この旅を通してまた自分の内側の時間感覚が変容するのではないかと思っている。北欧の時の流れはまた緩やかなものであるにちがいない。とにかく、ゆっくりと深くこの世を生きたいと思う。決して焦ることなく、また何かに追われることもなく、緩やかな自分の内側の時の流れの中で日々の生活を営んでいきたいと思う。フローニンゲン:2018/8/24(金)15:41

No.1260: An Emblem of Valor

As the weather forecast told, it started to rain in the afternoon. Looking at a drizzle, I become calm. I'll resume reading books. Groningen, 15:13, Sunday, 9/23/2018

3029. 夕方の作曲実践とTOEFL試験に向けて

先ほど降り始めた小雨がまた止んだ。窓の外の街路樹をぼんやり眺めてみると、数日前と比べて、さらに紅葉が進んでいることに気づいた。

夏の終わりと新たな季節の始まり。自然の運行と呼応するように自分の人生が進んでいくのを感じる。

今少しばかり書斎の窓際に近寄って、外の景色を改めて眺めてみた時に、行きつけのチーズ屋の女性店主が一生懸命自転車を漕いでいる姿を偶然にも見かけた。どうやら店主は自転車で通勤をしているらしい。今日は幾分風が強いため、自転車を力強く漕ぐ必要があったのだろう。確かに今日は風が少しばかり強いが、それでもなんとも言えない穏やかさがフローニンゲンの町を包んでいる。

これからモーツァルトに範を求めて作曲実践をする。これから参考にする変奏曲は、モーツァルトが25歳の時に作曲したものだ。最初の一曲目は構造的にシンプルながらも、おそらくモーツァルトらしさがそこに隠れているだろう。一見短く、さらには構造的にもシンプルに見える曲の中に、モーツァルトらしさが現れるということはとても面白い現象に思える。

魂は嘘をつけない。言い換えると、魂はそこに固有の姿を表さざるをえないのだということがわかる。

これから参考にする曲の中にモーツァルトの魂の特性が滲み出ている。それと対話をするようにこの作曲実践を進めていく。

昨日にGRE試験を無事に終えたことにより、今日からは本格的に自分の探究活動と創造活動に従事できる。今から行う作曲実践も大切な創造活動の一つである。

これからは再び作曲理論に関する書籍を読み進めていく。過去に読んだものを繰り返し読み、作曲理論に徐々に習熟していく。理論が自らの身体知になるように、実践と理論的学習を往復しながら日々を過ごす。ここから年始に向けては、自らの探究活動と創造活動に従事することと並行して、米国の大学院への進学に向けた準備も進めていこうと思う。準備に関しては、とにかく鬼門であるGREをすでに突破していることは大きなことだろう。今回出願する大学の中でGREやTOEFLに関して最も高い点数を要求しているのはハーバード大学教育大学院(HGSE)である。

幸いにも、GREに関してはライティングの点数はまだ出ていないが、その他のセクションに関しては納得のいく点数が出ている。仮にライティングの点数が思ったほど高くなくても、昨年に出版した英語の論文を出願資料に添付することによって、ライティングのスコアの補完としたい。

確かにHGSEはGREやTOEFLのような標準化されたテストの点数だけで志願者を判断せず、包括的なアプローチで出願者の見極めを行っているのは確かである。ただし、表向きはGREやTOEFLに関して足切りはないと述べているが、よくよくウェブサイトを確認すると、やはり最低限のスコアを取得していないと入学の許可を得られる確率はうんと低くなってしまうことがわかる。

TOEFLに関しては104点はその最低スコアであり、幸いにもこの点数は随分と以前にクリアしている。ただし、HGSEのTOEFL要件で厄介なのは、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの全てのセクションで26点以上を要求しており、まだ私はスピーキングで26点以上を取ったことがない。

昨夜四年ぶりにオンラインアプリケーションのウェブページを開いたところ、TOEFLの項目に関して仮に100点から103点のスコアにあり、TOEFLが自分の英語力を正しく評価していないと思う場合には、画面上のスピーキングタスクに回答し、その録音を提出することができる、という新しい募集項目が加わっていた。やはり、英語を母国語にしない出願者の中には、TOEFLが100点から103点の間にいる人が多く、これはその人たちのための応急処置のように思える。その項目を見たとき、おそらくTOEFLで100点を下回る非ネイティブは自動的にその場で不合格になるのだと推測した。

確かに自分は最低限のスコアを超えているが、スピーキングが26点を超えていないため、10月にTOEFLを一度受験し、仮にそこでもスピーキングのセクションで26点が取れなければ、アプリケーションの画面上のスピーキングタスクに回答し、その録音を提出したい。とりあえず10月にTOEFLを受験するが、そこに向けた準備はスピーキングに焦点を当て、GREのライティングセクションで行ったのと同じように、対策問題集のスピーキングの模範回答を繰り返し聴いて、どのような内容がどのように話されているのかを掴みたいと思う。

これまで何度もTOEFLを受験してきたが、こうした対策をこれまで真剣に行っていなかった自分に今となっては驚く。スピーキングに関しては、あまり高得点を望めないという思い込みが強かったのだろう。今夜にでも10月の試験の予約をしておきたいと思う。GREに引き続き、今回も小さなプロメトリックセンターで受験をしたいと思う。フローニンゲン:2018/8/24(金)16:08

今朝は五時半過ぎに起床し、起床した直後にシャワーを浴びた。今日からいよいよ北欧旅行に出かける。

昨夜から雨が降り始めていたが、今は止んでいる。これからもうしばらく天気もってくれればと思う。昨日は夜遅くまで今後の旅行の準備をしていた。「今回の」ではなく、「今後の」である。

幸いにも、ハーバード大学教育大学院(HGSE)のスティーブ・サイデル教授とキャサリン・エルギン教授からメールの返信がすぐにあり、9月末から10月初旬にかけてボストンを訪れる際に、面会およびクラスの見学をさせてもらうことになった。フローニンゲン大学に来る前もそうであったが、忙しいはずの教授たちがわざわざ時間を取って私のような外部の人間と面会をしてくださり、さらにはクラスまで見学をさせてもらえるということは本当に有り難い。

ジョン・エフ・ケネディ大学(JFKU)に入学した際にも、フローニンゲン大学に入学した際にも、結局どちらもその大学に直接足を運び、大学の雰囲気を実際に自分で感じてみるのが大切だった。JFKUに事前に足を運んだ際には、クラスの見学をする機会を得たが、フローニンゲン大学に事前に足を運んだ際には、時間の都合上、クラスを見学することはなかったが、大学に実際に足を運び、そこで教授たちと話をすることによって、大学の雰囲気を掴むことができたのは確かだ。今回の幸運な機会によって、HGSEの雰囲気を十分に感じるができるだろう。

私が関心を持っている芸術教育について体系的な学びをすることができる大学院は多くないが、HGSEを含め、いくつか検討している最中である。その中でも、HGSEが最難関の大学院ではあるが、非常にユニークなプログラムを提供しているため、非常に気になる存在である。

ボストンに訪れるのは四年ぶりだと思っていたが、実は五年ぶりだったことに昨日気づいた。米国を離れたのが今から四年前であり、その前年の秋にカート・フィッシャー教授と面会をしていたことを懐かしく思う。

今回はまず、ボストン到着の翌日にサイデル教授が提供する、芸術教育における実務的・哲学的側面に関するクラスに参加する。朝の八時半から正午までクラスがあり、その後サイデル教授と一

対一で話をする機会を得た。そこから二日間は土日を含め、土曜日にはHGSEの博士・修士のプログラム説明会があり、それにも参加しようと思う。アドミッションの方も参加するようであるから、TOEFLの要求得点を超えているが、スピーキングのセクションだけ要求の26点を超えていないため、この点について少しばかり確認の質問をしようと思う。

土曜日にそのイベントに参加したら、日曜日は七年ぶりにボストン美術館に足を運ぼうと思う。今から五年前にフィッシャー教授に会いにボストンに行った際はこの美術館を訪れることができず、七年前にロバート・キーガン教授に会いに行った時にこの美術館を訪れて以来だ。ボストン美術館以外にも、何か自分の関心を引く美術館や博物館がないか確認しておきたい。もし何もなければ、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの作品『森の生活』が生まれたウォールデン池及びその森に足を運びたいと思う。

月曜日の朝にエルギン教授の芸術理解に関する哲学のクラスを見学し、その他の日にソローの生活場所に訪れたいと思う。あとはハワード・ガードナー教授にもメールを送っており、その返信を待ちたい。

そろそろ今日から始まる北欧旅行に向けた最終準備を始めたいと思う。自宅を出発するのは午前八時過ぎた。ゆったりとした気持ちで北欧に出かけたい。フローニンゲン:2018/8/25(土)07:00

3031. 【北欧旅行記】スキポール空港に向かって

午前八時過ぎに自宅を出発し、先ほどフローニンゲン中央駅に到着した。今はもう列車の中にいる。ただし、列車はまだ動き出しておらず、プラットフォームに停車中だ。列車が出発するまでにもう少し時間がある。

これから始まる10日間の北欧旅行においても、普段と変わらずに日記を綴っていくだろう。もちろん、旅の最中はその瞬間の体験そのものが貴重なものであり、日記を綴るのはあくまでもそうした体験を一時のものにしないためにある。また、日記を書くことによって、実際に体験したことがそこから深まっていくことを促す。今回の旅においても無理のない範囲で、書きたいことを書きたいだけ日記として綴っていく。そのような旅行記が形作られていくだろう。

今日のフローニンゲンの上空には雨雲が浮かんでおり、駅に向かうまでは幸いにも雨が降っていないかった。気温は肌寒く、もう夏は終わりに近づいているのだということを知る。

今日からの10日間の北欧は天気の良い日が続くようで一安心だ。明日のストックホルムが少しばかり天気が悪いだけであり、残りは晴天の予報である。

北欧もすっかり肌寒くなっているだろうが、北欧の土地でゆっくりと過ごすことを想像すると、思わず陽気なひまわりのような気分になる。

そろそろ列車が出発する時刻が近づいてきた。これからスキポール空港に行き、ストックホルムの空港に飛ぶ。空港からストックホルム中央駅まで直通の列車が通っており、乗車時間は20分ほどである。駅に到着したら宿泊先のホテルに向かい、自室に荷物を置いたら辺りを散策したいと思う。

ストックホルムに到着するのは夕方であるから、散歩を楽しむ時間も少しはあるだろう。北欧から戻ってくる頃には、フローニンゲンの夏も完全に終わりを告げ、新たな季節が到来しているだろう。それを思うと、感慨深い気持ちになり、静寂の余韻が自分を包む。

これからスキポール空港に向かうまでの間は、現在協働執筆中の書籍の原稿に目を通そうと思う。協働執筆者の方から送ってもらった原稿をまず読み、そこにコメントと自分のコラムを執筆していく。これから目を通す章は、本書の山場でもあるため、コラムは少なくとも二つほど執筆しようと思う。空港に到着するまでの二時間の間にコラムの執筆まで終わるかもしれないし、終わらないかもしれない。

仮に執筆が終わらなければ、空港のラウンジで続きを執筆する。仮に執筆が終わってれば、過去の日記の編集に時間を充てたい。旅の期間は過去の日記を編集することがはかどる傾向にあり、今回の旅にもそれを期待している。今、列車がスキポール空港に向かってフローニンゲン中央駅を出発した。フローニンゲン中央駅:2018/8/25(土)08:48

今、アムステルダムスキポール空港のラウンジにいる。いつもと同じラウンジを活用し、先ほど昼食を摂った。

昨夜は夜遅くまでボストン行きの航空券やホテルの予約をしており、就寝のギリギリまでパソコンを眺めていたためか、少しばかり昨夜の睡眠の質に影響を与えていたようだ。実際に午前三時半に一度目を覚まし、そこから一時間おきに目を覚ます形で結局五時半に起床した。

フローニンゲンからスキポール空港に向かうまでは、ずっと協働執筆中の原稿のレビューをしていた。レビューに合わせてコラムを二つほど書いた。そのような形で過ごしていたため、ラウンジで昼食を摂ると、少しばかり眠気を感じ、先ほどいつもと同じように20分ほど仮眠を取った。仮眠から目覚め直前に夢見の意識に入っており、内的ビジョンを見ていたのを覚えている。

仮眠から目覚めると、もう眠気はなく、これからコーヒーでも飲みながら原稿のレビューの続きを行いたい。空港に向かう列車の中でもレビューは順調に進み、実際にすでに二つのコラムを執筆した。しかし、今レビュー中の箇所が本書の山場であり、分量が多いため、レビューがあと少しばかり残っている。もしかしたらもう一つほどコラムを執筆することになるかもしれない。

協働執筆者の方の物語がとても面白いため、ストーリーの流れを壊さない形でコラムを挿入するようにしている。一旦休憩としてコラムを挟んだ方が良さそうな箇所に自分のコラムを入れるように心がけている。コラムの内容も当然ながら、それまでのストーリーの内容を汲んだものになっており、成人発達理論の観点からコラムを執筆することを意識している。

ストックホルムに向かうフライトの搭乗時間まであと二時間ほどある。二時間あれば十分に全てのレビューを終えることができ、作曲実践をする時間もあるだろう。

今回の旅行にはバッハの371曲のコラールが収められた楽譜を持ってきた。レビュー後には四声のコラールに範を求めて一曲ほど作りたい。

それにしても今日のスキポール空港はいつにも増して人が多かったように思う。もしかするとこの時期の休日は、バカンスを終えた人たちが各々の国に帰る時期と重なっているのかもしれない。セキュリティに関してもいつもより厳重であり、自分を含め、多くの人たちがスーツケースの中を念入りに調べられていた。バカンスから戻るラッシュは今週の週末と来週の週末だろうか。北欧旅行から帰る頃には空港内の忙しさも落ち着いたものになっているだろう。とにかく今回の北欧旅行では、心のゆとりを持ってゆっくりと旅を楽しみたい。スキポール空港:2018/8/25(土) 12:45

No.1261: A Drizzle of Dark Night

It is approaching 9 PM, and the outside world is very dark. It seems to drizzle. Groningen, 20:48, Sunday, 9/23/2018

3033. 【北欧旅行記】北欧の空の上から

ストックホルムへ向けた飛行機が離陸し、今私は空の上にいる。私は普段、フローニンゲンの自宅の書斎の窓から空を眺め、外に出かける時も大抵空を見上げることが習慣になっている。

今この瞬間の私は、普段見上げている空を眼下に眺めている。普段見ているものを違った次元から眺めることは、不思議な感覚をもたらしてくれる。これまで気づかなかったようなことにハッと気づかせてくれるような、そんな驚きをもたらす感覚がここにある。

昨夜は来月末のボストン訪問に向けた各種の予約をしていたことと、今朝は今日からの旅行に向けた荷造りに時間を取っていたため、出発前に自宅で日記を書く時間が十分になかった。いつも旅行に出かける時は、出発前に幾つか日記を書き留め、旅行に向けて心を整えるのだが、それが今日はあまりできなかったように思う。もちろん、最低限の文章を書き留め、スキポール空港に向かう列車の中でも日記を書いていたが、自宅を出発する前に諸々のことを整理しておく必要があったように思う。実際にスキポール空港に到着した時に感じていたのは、どこか身体だけ空港に移動してしまったかのような感覚であった。

「心ここに在らず」という言葉が示すように、自分の心はまだ北欧旅行の中になかったように思う。それに気づいてからは、心を今ここに戻すように意識をした。空港のラウンジでゆっくりとくつろぎ、こ

れから始まる旅に向けて心を落ち着けていった。そのおかげもあり、今は随分と今ここにあるような感覚がする。

毎日がライフワークの中にあり、毎日が休暇であるという生活。こうした生活が実現されていることは本当に有り難いことである一方で、そうした生活を真に意味のあるものにしていくためには、そしてさらにそれを深めていくためには、常に自己規律と自己克己が必要になる。つまり、今のこの生活を継続させていくためには、弛緩でも緊張でもなく、両者が均衡し、その均衡点の上にある青空のような感覚的境地が必要になる。さもないと、こうした生活は墮落に陥るか、自己耽溺に留まるだろう。

飛行機の窓の外には、真っ白な雲海が広がっている。雲海の上には空しかない空がある。

「空しかない空がある」という情景を眺めていると、「空(くう)」の感覚が身体に流れ込んでくる。それはないのだからあり、あるのだからない、という矛盾した無矛盾の真実を教えてくれる感覚だ。

ストックホルムに到着するまであと一時間を切っただろうか。これから始まる北欧の旅を通じて、私は何を見て、何を感じ、何を学ぶのだろうか。欧州での生活も三年目を迎えたが、毎日が本当に未知との遭遇だ。そうした日々の中にあって、旅が開示してくれる未知なるものは、私の内側をさらに開いたものにしてくれる。人間発達の要諦は、未知なるものとの遭遇による「自己開放」であり、そこからの「自己解放」にあるのだと思う。

確かに今日も一人の人間が、一人の日本人がこの地球上で生きている。それを今私は感じている。
北欧上空:2018/8/25(土)16:13

3034. 【北欧旅行記】 スtockホルムでの失態と子犬との出会い

ストックホルム滞在の初日が終わりに近づいてきている。ストックホルムの空港からストックホルム中央駅までは特急列車が走っており、わずか20分で両地点を行き来することができる。列車の本数も多く、飛行機を降りて駅に向かうと、すぐさま次の列車に乗ることができた。これは昨年デンマークからスウェーデンのマルメに向かう列車の中でも感じたが、スウェーデンの特急列車はとにかく車内が

綺麗だ。本日乗った特急列車も車内がとても綺麗であった。この車内の電光掲示板にその時点での列車の速度が表示されており、最速時は時速200kmほどの速度であった。

空港からストックホルム市内の中央駅に乗り換え無しで到着できることは非常に有り難い。駅に到着してから宿泊先のホテルまでの道のりもわかりやすかった。

ホテルに向かうまでの道のりの景色に関心を持って眺めてみると、ストックホルムにもやはり固有の精神が存在していることがわかる。それが景観に滲み出しており、他の都市とは違う独自さを醸し出している。町の景観とその精神については、明日以降ゆっくりと町を散策しながら改めて考えてみたい。

今ホテルの部屋でこの日記を綴っている。部屋に置かれていたホテルの歴史を伝える書籍を手にとって眺めていると、このホテルは1925年に建築された建物がそのまま使われているようだ。そのためか、部屋の中もとても落ち着いた雰囲気を持っている。部屋に飾られている絵画も中世時代のものであり、画風はフェルメールの絵のように思えるのだが、この作品がフェルメールのものなのかは定かではない。またオランダに戻ってから作者を調べてみたいと思う。

ホテルに到着したのは午後の六時過ぎであり、随分とお腹が減っていたので、部屋に荷物を降ろすと、すぐさま夕食を食べに出かけた。旅行中に限ってなぜだか私は日本食が食べたくなることがある。旅行中は、滞在先の町で日本食レストランを探し、そこで夕食を食べるか、近所のローカルのスーパーに行ってお惣菜を買ってホテルの自室で食べるのかどちらかのことが多い——いや、厳密にはその二択のうちのどちらかしかない。

今日はホテルから20分ほど歩いたところにある日本食屋に行こうと思い、楽しみにしてホテルを後にした。日本食屋までの道のりは当然ながら初めての景色であったため、好奇心で見開いた目でその景観を楽しんでいた。20分ほど歩くと、目当ての日本食屋に到着した。店員はアジア系の外国人のようだった。マグロ丼とサラダを注文し、会計をしようと思ったところ、財布が見当たらなかった。

どうやらホテルの自室に財布を忘れたようだった。財布をホテルに忘れるという失態をしたのは初めてであり、カバンの中にはシュタイナー教育に関する書籍と、食後のデザートのために空港のラウンジでもらってきたオレンジしかなかった。店員に謝り、私はトボトボと来た道を折り返し、ホテルに

戻った。ホテルに引き返している最中に、カネがない場合にどのように飯を食べるかにする方法について考えていた。

ホテルまで引き返す道にはレストランが溢れており、この季節はまだ外のテーブルで飲み食いを楽しんでいる人が多く目に付いた。仮にカネが一銭もない場合、外で飲み食いしている人の中で陽気な雰囲気を発している人にそれとなく声をかけ、話に花を咲かせることによってカネがなくても飲み食いができそうだと思います、少しばかり笑みが漏れた。

そのような妄想をしていると、ホテルに到着した。チェックインを担当してくれた気さくそうなスウェーデン人女性に財布と部屋のキーカードを自室に忘れてしまった旨を伝え、代わりのカードをもらった。お礼を述べ、部屋の机の上に置かれていた財布を取り、すぐさま夕食を食べに部屋を後にした。再度受付に行き、代わりのカードを返してホテルを後にしたことを思い出していた。

午後にチェックインを済ませ、自室に入った時にも愛らしく感じていたが、改めて部屋に戻った時に、ベッドの上に置かれている三匹の犬のぬいぐるみがとても可愛らしく思えた。三匹ともトイプードルのようだ。一匹は親犬であり、もう二匹は子犬である。これはサービスとして自室に置かれているのだが、持ち帰ることはできない。ただし、それらのぬいぐるみを購入することができるらしい。三匹のうちの子犬の一匹がとても可愛らしく、購入するかどうかを迷ってしまうほどだ。

いくら小さいぬいぐるみとはいえ、スーツケースに入れるとかさばってしまうかもしれないのが難点であり、とりあえず今日からの五日間はその子犬の名前を「ストック」と命名することにした——ストックホルムで出会ったため。もう少し練られた名前が欲しいとストックが言うかもしれないので、古代スウェーデン語の“stock”の意味を考慮して、「叡智・希望・愛情・幸福の集まり」という意味をその名前に込めようと思う。

気がつけばもう午後10時を過ぎていた。移動の疲れもあるため今日はもう寝ることにして、明日からの活動に備えたいと思う。ストックホルム:2018/8/25(土)22:24

ストックホルム滞在の二日目の朝を迎えた。昨夜は移動の疲れもあってか、ぐっすりと眠れた。そのおかげもあり、今日は朝から気力に満ちている。

旅行中はいつも以上に不思議な夢を見ることが多い。今朝方も強い印象を与える夢を見ていた。

激しく乱高下する波の波動を眺め、その乱高下によって自分の気持ちが幾分動かされそうになり、それを冷静になって受け止めようとしているような夢だった。その乱高下する波は、金融市場における何かしらの投資商品の価格の値動きなのではないかと思う。その後も断続的に印象に残る夢を見ていた。

ストックホルムの町を本格的に散策するのは今日からだが、昨日の時点で幾つか気づくことがあった。ストックホルムは確かにスウェーデンの首都であり、この国における政治や経済の中心地であるが、町全体として落ち着きがある。町の中にある建物には歴史を感じさせるものが残っていたり、デザインが洒落た家も多々ある。昨日、日本食屋に向けて歩いている際には公園がいくつか目に止まった。

そうした側面がある一方で、ストックホルムの若者は威勢が良い者が多い。というのも、運転席がある列に三席ほどあるような古びた車を乗り回し、窓を開けながら大音量の音楽を流す者が多々いることに気づいた。良く言えばノリが良く、悪く言えば周りを考えない形で運転をする若者が多いように思えた。昨日は結局、ホテルの直ぐ近くのイタリアンレストランで夕食を摂ったのだが、その時、外のテーブル席に座って食事をしていると、音楽を大音量に流しながら走る車を何台も目撃した。そしてそれは就寝の時間まで断続的にやってきた。

宿泊しているホテルの自室にも、ストックホルムはナイトライフが充実しているため、騒音防止のための耳栓が置かれていた。確かに昨夜も道行く車の音が耳に入ったが、睡眠を妨げるほどのものではなく、耳栓を使うことなく就寝ができた。

さて、今日から本格的にストックホルムの町を観光する。今日もよく歩くであろうから、後ほどホテルの朝食をしっかり摂っておきたい。

朝食を摂って少しばかり休憩したら、今日はまずスウェーデン歴史博物館に足を運ぶ。ここにはヴァイキング時代からの芸術作品が所蔵されており、この機会にスウェーデンの歴史に対する理解を深めたいと思う。この博物館をゆっくりと見た後に訪れるのは、ストックホルム音楽博物館である。ここでは、スウェーデンに古くから伝わる音楽を出発地点とし、そこから現代音楽にかけての歴史的な変遷について理解を深めることができればと思う。

夕方から雨が降るかもしれないので忘れずに傘を持参し、二つの博物館を訪れた後に時間があれば、ストックホルムの町を少しばかり散策したいと思う。明日以降の方がより時間があるため、散策は無理をする必要はない。今日からの本格的なストックホルム観光が楽しみである。ストックホルム：
2018/8/26(日)07:28

No.1262: Daily Work

It suddenly started to rain. Today's weather is not so fine, but I'll engage in my lifework, relying on hope. Groningen, 06:54, Monday, 9/24/2018

3036.【北欧旅行記】過去の記憶と小さな土台

早朝に降っていた雨が止み、ストックホルムの上空に晴れ間が見え始めた。結局昨日は日記を執筆することを優先していたため、作曲実践ができなかった。朝食までの時間に一曲ほど作れたらと思う。

気がつくと、時々過去の記憶の中に自分がいることがある。あの時はもう戻ってくることはないのだが、なぜかそうしたことを行う自分がいる。昨日もそのような瞬間があった。帰らぬ時の中にも、常なる今の中にも、他にないということがわかってくる。人は過去の記憶の中にいたとしても、それは今の中にも、他にないのだ。

昨日の日記の中で、ホテルの自室に置いてあった三匹の子犬のぬいぐるみについて言及していたように思う。そのうちの一匹が特に可愛らしく、実家にいるトイプードルの愛犬を彷彿とさせる。そのぬいぐるみには「ストック」という名前を付け、この滞在期間中は存分に可愛がることにした。

そういえば、私が敬愛する辻邦生先生もクマのぬいぐるみを可愛がっていたという話をふと思い出した。また、昨年の夏にノルウェーのベルゲンを訪れ、そのエドヴァルド・グリーグ博物館に足を運んだ時、グリーグはカエルの人形を可愛がっていたことを知った。特に演奏会の時には肌身離さずその人形を持っていたそう。

そんなエピソードを思い出しながらストックを眺めていた。ストックをオランダに連れて帰るかどうかはまた考えようと思う。

今はストックホルムにいるにもかかわらず、数日前に滞在したアムステルダムを思い出した。アムステルダムの街を歩きながら、できるだけ多くの人が幸せである社会について思った。また、道徳心・倫理心、そして感性と霊性が育まれた人間ができるだけ多い社会について思った。逆の状況を想像をすると、なんだか世界が恐ろしくなった。

自分にできることはごくわずかなことかもしれない。だが、それを行うという決意のようなものが芽生えてくる。

何かを自分が成就する必要は一切ない。自分の仕事を引き受ける人がいつかこの世界に出て来てくれればそれでよく、その人がさらに自分の仕事に何かを積み上げていってくれればいいのだ。自分はその小さな土台を毎日時間をかけて作っていこう。そんなことを思った。

アムステルダムの夕方に吹く風は涼しかった。天から地上に垂れるような笹の葉を見た。それが風にたなびいていた。そのような記憶がふと甦ってきた。また過去の記憶の中に自分がいたことを知る。

小さな土台を作り、その土台をまだ見ぬ誰かに引き渡すために、今日という一日が自分に与えられているように思う。そのような一日を大切に過ごしたいと思う。ストックホルムの朝はとても静かだ。ストックホルム:2018/8/26(日)08:03

No.1263: Composition Grammar

The sky brightened after 7 AM. It stopped raining, and the outside world becomes serene. I'll compose a piece of music based on Haydn's work. I suppose that I'll be able to establish my own

composition “grammar” in some years by composing a few thousand small pieces of music on the basis of past great composers’ works. Groningen, 07:18, Monday, 9/24/2018

3037.【北欧旅行記】水の精霊が住むストックホルム

先ほど、ストックホルムの観光を終え、ホテルの自室に戻ってきた。いついかなる時も自分の中の好奇心を司る眼が見開かれ、日常が絶えず新たなものとして知覚されるようになって久しいが、旅先ではなお一層好奇心を司る眼が開かれる。

今日もストックホルムの町を歩きながら、好奇心を司る眼が完全に見開いていたように思う。未知なる町に足を運び、そこを歩き回することは脳と意識の双方を間違いなく刺激していることがわかる。

旅が私たちを深めてくれる力を持っているというのは本当だと私は思う。もちろん、旅をほとんどすることなく自らの人生を深めてきた過去の偉人は存在するが、モーツァルトやゴッホを含め、旅を通じて自己の才能を育んだり、自己の人生を深めていった偉人は多いように思えてくる。

ストックホルムに滞在してまだ二日目だが、スウェーデンという国はオランダと同じように、英語が全く不自由なく通じるため非常に気が楽だ。英語が市民のどの層にまで浸透しているかというのは、私のような外国人が生活をする上で極めて重要になる。感覚として、オランダとスウェーデンはほぼ同じぐらいに両国のあらゆる人の中で英語が浸透しているように思う。一方で、今年の春に訪れたポーランドとハンガリーは少し事情が違った。

もちろんホテルや美術館などの受付の人たちは英語が不自由なく話せたが、ローカルなスーパーの店員は英語があまり話せないようであった。欧州の国を色々と巡ってみると、英語の浸透度合いとその国の文化や国力の違いなどが見えてくる。

今日は日曜日ということもあり、ストックホルムの町は落ち着いているように思えた。もちろん、年中この町には観光客が訪れるであろうから、日曜日もそれなりの人が町にいたのは間違いない。だがそれはこの町の落ち着きを壊さない程度においてであった。

今日はスウェーデン歴史博物館とスウェーデン音楽博物館に訪れた。前者に関しては、金と銀の歴史、そしてそれらを使った装飾品の印象が強く残っている。ちょうどそれは博物館の一階にあり、まずはそれを鑑賞するのに十分な時間を使った。その後、二階と三階の展示品を続けざまに見ていった。そのどちらかの階にオルガンの歴史を伝える展示品があり、ソファに腰掛けてオルガンの音を聞ける場所があった。

私はそこに腰掛けて、オルガンの音に耳を傾けていた。すると突然、大きな睡魔が襲ってきて、私はそこでしばらく眠りの世界に陥っていた。昨日の移動の疲れがあったのかもしれず、その時間帯はまだ昼前だったのだが、抑えがたい眠気に勝てずにその場で寝ていた。眼を覚ますと、とてもすっきりした状態になり、そこからまた博物館内を見て回った。

歴史博物館の中にいる時に雨が降り始め、博物館を出る頃には雨が上がっていた。雨上がりのストックホルムはまた別の美しさを醸し出していた。

ストックホルムは水の都と形容されるように、町を取り巻く水が美しい。歴史博物館から音楽博物館に移動する最中も、船着き場を眺めながら、町と水とのコントラストを堪能していた。

数日後に訪れるヘルシンキには森の精霊がいるような感覚があり、ストックホルムには水の精霊がいるのかもしれない。明日は今日歩かなかった道を歩き、ストックホルムのまだ見ぬ表情を眺めたいと思う。ストックホルム:2018/8/26(日)17:47

No.1264: Rhythm of Fine Weather

It's too good to be true, but it has stopped raining. I'll begin to read some books. Groningen,
09:00, Monday, 9/24/2018

3038.【北欧旅行記】ストックホルム滞在二日目を終えて

時刻は夜の九時を迎えた。ストックホルム滞在の二日目が終わりに近づいている。今日もよく歩いたため、もう少ししたら就寝しようと思う。早めに寝て明日の観光に備えたい。

今日は観光を終え、ホテルの自室に戻ってくると突然雨が降り出した。雨脚は幾分強かった。

今は雨も止み、明日からは晴れの日が続くそうであり、とても有り難い。今日は昨日と違って、街中を大きな音楽をかけながら走る車を見ることはなかった。

昨日少々威勢の良い若者が多いなと感じていたのは、どうやらネオナチの若者集団300人がストックホルムでデモを行っていたことと関係していたのかもしれない、と先ほどローカルニュースを見て思った。詳しくはわからないが、何やら彼らはネオナチの政党の勢力を拡大することを政府に懇願しているらしい。ローカルニュースによると、スウェーデンにおけるネオナチの活動は近年活発になってきているようだ。その背景にはどのようなことがあるのか気になるところである。

今年の4/20日のアドルフ・ヒトラーの誕生には、ネオナチのグループがヒトラーの顔が入った旗を立てたことによって警官の取り調べに遭ったということが報道されていた。昨日は動物擁護の団体と合同で、合計500人ほどがストックホルムの各地でデモ行進をしていたようだ。そうしたこともあって、昨日は少しばかり騒がしかったのかもしれない。

ネオナチのある一人の人間が、「自己を脅かす存在に対して暴力に訴える形でそれを破壊する権利が民主主義には常にある」という主張をしていた。一見するとこれは合理的な発言のように見えるが、利己的な意味が多分に含まれていることに気づく。

世界各国の政治情勢を眺めてみた時に、結局のところ、この世界の集合的な意識の発達はこの100年間に於いてそれほど進歩していないことが見えてくる。そのようなことをニュースを見ながら改めて思った。

明日は、ノーベル博物館を訪れようと思う。ノーベル賞の授賞式は、平和賞以外は全てストックホルムで行われる。先ほど平和賞の授賞場所を調べてみると、平和賞の授賞式はオスロで行われていることを知る。

明日に訪れるノーベル博物館は、ノーベル賞に関係する様々な資料を閲覧できるらしく、今回のストックホルム滞在で最も楽しみにしていた博物館の一つだ。過去の受賞者にはどのような人物がいて、どのような功績を残したのかをゆっくりと理解していきたいと思う。

明日の観光場所はノーベル博物館だけを予定しているため、一日の多くの時間をここで過ごそうと思う。開館時刻は午前九時であり、閉館時刻は午後八時とのことであるから、随分と長く開いている博物館だ。ホテルの朝食をゆっくり摂って、少し休憩してから十時ごろを目安にホテルを出発し、ノーベル博物館まで歩いていこうと思う。宿泊先のホテルからノーベル博物館までの道のりはまだ一度も歩いていないので、その景色も楽しみだ。

ホテルの目の前の大通りをまっすぐ南下していけば博物館に到着する。明日はここで多くの時間を過ごし、行きと帰りは周りの景色を堪能したいと思う。ストックホルム:2018/8/26(日)21:20

No.1265: Afternoon Greeting

I made good progress with my reading in the morning. I continue to read Jürgen Habermas' "Moral Consciousness and Communicative Action (1990)." My aim is to comprehend Kohlberg's philosophical frameworks of his moral developmental theory. Groningen, 15:40, Monday, 9/24/2018

3039.【北欧旅行記】ストックホルム滞在の三日目の朝に

昨夜は十時前に就寝し、今朝は七時に起床した。一度三時半に目を覚ましたが、そこで起床することなく、そこから七時まで寝ることにした。十分な睡眠を取ったため、今の心身の調子はとても良好だ。

ストックホルム滞在の三日目が始まった。昨日の天気予報によれば、今日は一日中晴れのはずだったが、どうやら午後五時から雨が降り始めるようだ。

本日の予定としてはノーベル博物館に訪れるだけだったので、博物館を見学後、少しばかり辺りを散歩したら、雨が降る前にホテルの自室に戻ってきたいと思う。夕方からはおとなしく自室で本を読んだり、作曲をしたり、あるいは過去の日記を編集するなどして過ごしたいと思う。

昨日もカフェで今回の旅に持参したシュタイナー教育に関する書籍を読んでいた。書籍を読みながら、シュタイナー教育に関する理解をさらに深め、人智学そのものを深く学びたいという思いが静かに湧き上がってきた。直近の一、二年は再び米国の大学院で探究を続けることができればと考え

ており、その後はスイスのドルナッハで生活することを考えている。ドルナッハにある精神科学自由大学に通い、人智学を学べる一年間のプログラムに所属できれば幸いだ。それは学位を取得するようなプログラムではなく、修了証がもらえる程度のプログラムだと思う。とはいえ、人智学を深く体系的に学ぶことができる世界で唯一のプログラムであることに代わりはないだろう。

仮に精神科学自由大学で学びを得ることになれば、一年間でドルナッハを去るのではなく、同じプログラムを二回繰り返し受けたいと思う。最低でも二年間ほどの時間をかけて、なおかつ繰り返しによって人智学に対する理解を深めていく。

同じテーマを何度も繰り返し扱うことによって、徐々に理解を深めていく。そのようなことをストックホルムに滞在中の今思う。意識を再び今この場所に戻していこう。

今日も朝食をしっかりと摂り、昼食を抜くことにする。昨日は朝食だけを摂り、昼食を抜くだけのみならず、夕食も摂らなかった。夜に食べたのはオレンジ一つであった。さすがにそれだと就寝前にお腹が空いてきたので、今日は夕食をローカルのスーパーで購入しようと思う。今日は日本食を食べたいと思うような気分ではない。

朝食の時間まで、過去に作った曲を編集し、一曲ほど作曲をしようと思う。過去の曲を編集する際には、曲によって喚起された内的感覚をデッサンする。ここ最近気づいたのは、デッサンをする時に、不思議と円を描くことが多いことである。当然聴く曲によりけりなのだが、大小さまざまな円を無意識的に描いている自分がいる。

円を無意識に描くのはなぜなのだろうか。自分の内側にある何が円を描かせるのだろうか。とても興味深い。おそらく何かしらの理由がそこにあり、それを知ろうとする意識を今後も絶えず持つておくことにする。雨が降り出す午後五時まで、今日もストックホルムの観光を堪能したい。ストックホルム:2018/8/27(月)07:31

3040.【北欧旅行記】ノーベル博物館を訪れて

少し前にホテルに戻ってきて、今は自室でくつろいでいる。幸いにも雨が降る前にホテルに戻ってくることができた。

今日は午前中からホテルに戻ってくるまでの時間は晴天に恵まれ、観光日和であった。ホテルからノーベル博物館までの道のりの中でも、運河を越え、ノーベル博物館近くの景観が特に見ものであった。豪華かつ歴史を感じさせる建造物がそこにはいくつも立ち並んでおり、見る者を圧倒するような景観であった。ノーベル博物館近くの道は石畳でできており、博物館周辺は歴史的な雰囲気があった。

本日訪れたノーベル博物館についてであるが、ここは期待していた通りの博物館であった。これまでノーベル賞の歴史や歴代の受賞者については疎かったが、博物館に所蔵されている様々な展示物と無料で提供されているガイドの説明のおかげで随分と理解が深まった。

偶然にも、ノーベル賞の生みの親であるアルフレッド・ノーベルと私の誕生日が重なっていることを知り、ノーベルという人物が少し近くに感じられるようになった。

「一年のうちに300ほど仮にアイデアが生まれたとしても、そのうちの一つだけが何か意味のあるものを生み出すことに有益であると確信している」とノーベルは述べており、私も同様なことを考えている。日々日記を執筆し、毎日作曲をしていく中で感じているのは、それら一つ一つの創造物は一つのアイデアを元に生まれているが、そこからさらに意味のある新たな創造物に派生していくものの数は少ない。

もちろん、掘り下げ方によっては新たな創造物につながる可能性もなくはないが、創造物そのものが持つ力を考えてみた場合に、数百の創造物のうちの一つが次々と新たなものを生み出すことにつながっていく、という感覚を持っている。まさにノーベルが述べていたこととこれは感覚的に近い。

ノーベル博物館そのものは一階しかなく、非常に小さな博物館なのだが、展示資料が非常に興味深いものばかりであり、それらをゆっくりと眺めていると随分と時間が経った。また、館内で上映されている、歴代のノーベル賞受賞者のエピソードが三分間でまとめられたドキュメンタリーを見始めるときりがなく、随分と多くの数のエピソードを見ていたように思う。

ノーベル賞受賞者の秘話や創造性についてより理解を深めたいという気持ちが起こり、ショップで売られていた『ノーベル賞の百年:創造性の素顔(2002)』という書籍を購入した。ショップの中で本書の中身を眺めていると、これは必ず購入すべき書籍だとすぐにわかった。それぞれのノーベル

賞受賞者のエピソードからは励ましがもたらされ、書籍の各ページからノーベル賞受賞者の創造性が滲み出てきているように感じた。今日はこれから本書をゆつくりと読み進めていきたいと思う。ストックホルム:2018/8/27(月)16:56

No.1266: On An Autumn Night

Today is now approaching the end, and it was fulfilled to me. I'll go to bed, wishing that tomorrow will be as fulfilled as today. Groningen, 21:29, Monday, 9/24/2018